

中島  
敦

牛  
人





牛

人



魯ろの叔孫豹しゆくそんひようがまだ若かつた頃ころ、乱を避さけて一時せい齊せいに奔はしつたことがある。途みちに魯の北境こくそう庚宗の地ちで一美婦を見  
た。にわかねんごに懇ねんごろとなり、一夜を共に過たして、さて翌  
朝別れて齊に入った。齊せいに落着たいふき大夫こくし国こく氏の娘むすめを娶めとつて  
二児を挙およげるに及およんで、かつての路傍ろぼう一夜の契ちぎりなどは  
すっかり忘れ果おぼててしまった。

ある夜、夢ゆめを見た。四辺あたりの空気が重おもく立たち罩こめ不吉  
な予感よかんが静しずかな部屋へやの中なかを領りやうしている。突然とつぜん、音も無く

室の天井てんじょうが下降し始める。極めて徐々じょじょに、しかし極めて確実に、それは少しずつ降りて来る。一刻ごとに部屋の空気が濃こく淀よどみ、呼吸が困難になってくる。逃げようともがくののだが、身体からだは寢床ねどこの上に仰向あおむいたままどうしても動けない。見えるはずはないのに、天井の上を真黒まっくろな天が盤石ばんじやくの重さで押しおつけているのが、はつきり判わかる。いよいよ天井が近づき、堪たえ難い重みが胸を圧した時、ふと横を見ると、一人の男が立っている。恐ろしく色の黒い傴僂せむしで、眼めが深く凹くぼみ、獣けもののように突出つきでた口をしている。全体が、真黒な牛に良く似た感じである。

牛！ 余われを助けよ、と思わず救を求めると、その黒い男が手を差さ伸べて、上からのし掛かかる無限の重みを支えてくれる。それからもう一方の手で胸の上を軽く撫なでてくると、急に今までの圧迫感あっぱくかんが失なってしまった。ああ、良かった、と思わず口に出したとき、目が醒さめた。

翌朝、従者下僕等しもべらを集めて一々検しらべてみたが、夢の中の牛男うしおとこに似た者は誰だれもいない。その後も齊の都に出入する人々について、それとなく気を付けて見るが、それらしい人相の男には絶えて出会わない。

数年後、再び故国に政変が起り、叔孫豹は家族を齊に

残して急遽きゆうきよ帰国した。後、大夫として魯の朝ちように立つに及んで、始めて妻子を呼ぼうとしたが、妻は既にすで齊の大夫某ぼうと通じていて、一向夫の許もとに来ようとはしない。結局、二子孟丙もうへい・仲壬ちゆうじんだけが父の所へ来た。

ある朝、一人の女が雉きじを手土産てみやげに訪ねて来た。始め叔孫の方ではすっかり見忘れていたが、話して行く中うちにすぐ判った。十数年前齊へ逃のがれる道すがら庚宗の地で契つた女である。独りかと尋たずねると、倅せがれを連れて来ているという。しかも、あの時の叔孫の子だというのだ。とに



かく、前に連れて来させると、叔孫はアツと声に出した。色の黒い・目の凹んだ・傴僂なのだ。夢の中で己を助けた黒い牛男にそっくりである。思わず口の中で「牛ぎゆう！」と言ってしまった。するとその黒い少年が驚おどろいた顔を、して返辞をする。叔孫は一層驚いて、少年の名を問えば、「牛ぎゆうと申します」と答えた。

母子共に即刻そつこく引取られ、少年は豎じゆ（小姓）の一人に加えられた。それ故、長じて後もこの牛に似た男は豎牛じゆぎゆうと呼ばれるのである。容貌ようぼうに似合わず小才せうさいの利きく男で、すこぶる役には立つが、いつも陰鬱いんうつな顔をして少年仲間

の戯たわむれにも加わらぬ。主人以外の者には笑顔一つ見せない。叔孫にはひどく可愛かわいがられ、長じては叔孫家の家政一切いっさいの切廻きりまわしをするようになった。

眼の凹んだ・口の突出た・黒い顔は、ごく偶たまに笑うとひどく滑稽な愛嬌あいきょうに富んだものに見える。こんな剽軽ひょうきんな顔付の男に悪企わるたくみなど出来そうもないという印象を与あたえる。目上の者に見せるのはこの顔だ。仏頂面ぶつちようづらをして考え込む時の顔は、ちよつと人間離ればなのした怪奇かいきな残忍ざんにんさを呈ていする。儕輩さいはいの誰彼だれかれが恐れるのはこの顔だ。意識しないでも自然にこの二つの顔の使い分けが出来るらし

い。

叔孫豹の信任は無限であつたが、後嗣あとつぎに直そうとは思  
 っていない。秘事ないし執事しつじとしては無類と考えていた  
 が、魯の名家の当主とは、その人品じんぴんからしてもちよつと  
 考えにくいのである。豎牛ももちろんそれは心得ている。  
 叔孫の息子達むすこたち、殊ことに齊から迎むかえられた孟丙・仲壬の二人  
 に向つては、常に慇懃いんぎんを極めた態度をとっている。彼等  
 の方では、幾分いくぶんの不気味ぶきみさと多分の軽蔑けいべつとをこの男に感  
 じているだけだ。父の寵ちようの厚いのに大して嫉妬しつとを覚え  
 ないのは、人柄ひとがらの相違そういというものに自信をもっているか

らであろう。

魯の襄公じょうこうが死んで若い昭公の代となる頃から、叔孫の健康が衰おとろえ始めた。丘薺きゅうじという所へ狩かりに行つた帰りに悪寒おかんを覚えて寝付いてからは、ようやく足腰あしこしが立たなくなつて来る。病中の身の廻りの世話から、病床びょうじやうよりの命令の伝達に至るまで、一切は豎牛一人に任せられることになつた。豎牛の孟丙等に対する態度は、しかし、いよいよ遜へりくだつてくる一方である。

叔孫が寝付く以前に、長子の孟丙のために鐘かねを鑄ちゆうさ

せることに決め、その時に言った。お前はまだこの国の諸大夫と近附ちかづきになつていないから、この鐘が出来上つたら、その祝を兼ねて諸大夫を饗応きようおうするがよからうと。明らかに孟丙を相続者と決めての話である。叔孫が病やまいに伏ふしてから、ようやく鐘が出来上つた。孟丙は、かねて話のあつた宴会えんかいの日取の都合つごうを父に聞こうとして、豎牛にそのむねを通じてもらつた。特別の事情が無い限り、豎牛の外は誰一人病室に出入出来なかつたのである。豎牛は、孟丙の頼たのみを受けて病室に入ったが、叔孫には何事も取次がない。すぐ外へ出て来て孟丙に向い、主君の

言葉として出鱈目でたらめな日にちを指定する。指定された日に孟丙は賓客ひんきやくを招き盛んさかに饗応して、その座で始めて新しい鐘を打った。病室でその音を聞いた叔孫が怪あやしんで、あれは何だと聞く。孟丙の家で鐘の完成を祝う宴が催もよおされ多数の客が来ているむねを、豎牛が答える。俺おれの許ゆるしも得ないで勝手に相続人面づらをすることは何事だ、と病人が顔色を変える。それに、客の中には齊いっせいにいる孟丙どの殿の母上の関係の方々も遙々はるばるみえているようです、と豎牛が附加える。不義を働いたかつての妻の話を持出すといつも叔孫の機嫌きげんが見る見る悪くなることを、良く承知してい

るのだ。病人は怒いかって立上がろうとするが、豎牛に抱だきとめられる。身体に障さわってはいけないというのである。俺がこの病でてつきり死ぬものと決めて掛かって、もう勝手な真ま似ねを始めたのだなと齒は咬がみをしながら、叔孫は豎牛に命ずる。構まわぬ。引捕ひつとらえて牢ろうに入れる。抵抗ていこうするようなら打殺してもよい。

宴が終り、若い叔孫家の後嗣は快く諸賓客を送り出したが、翌朝は既に屍し体たいとなつて家の裏藪うらやぶに棄すてられていた。

孟丙の弟仲壬は昭公の近侍某と親しくしていたが、一日友を公宮に訪ねた時、たまたま公の目に留った。二三言、その下問に答えている中に、気に入られたとみえ、帰りには親しく玉環を賜わった。大人しい青年で、親にも告げずに身に佩びては悪かろうと、豎牛を通じて病父にその名誉の事情を告げ玉環を見せようとした。牛は玉環を受取って内に入ったが、叔孫には示さない。仲壬が来たということさえ話さぬ。再び外に出て来て言った。父上には大変お喜びですぐにも身に着けるようにとのことでした、と。仲壬はそこで始めてそれを身に佩びた。



数日後、豎牛が叔孫に勧める。既に孟丙が亡ない以上、仲壬を後嗣に立てることは決っている故、今から主君昭公にお目通りさせてはいかが。叔孫がいう。いや、まだそれと決めた訳ではないから、今からそんな必要はない。しかし、と牛が言葉を返す。父上の思おほしめし召はどうかあるろうと、息子の方では勝手にそう決め込んで、もはや直接君公にお目通りしていますよ。そんな莫ば迦かな事があるはずは無いという叔孫に、それでも近頃仲壬が君公から拝領したという玉環を佩びていることは確かですと牛が請うけ合う。早速さっそく仲壬が呼ばれる。果して玉環を佩びている。

公からの戴いただきものだと云いう。父は利かぬ身体を床とこの上  
に起して怒った。息子の弁解は何一つ聞かれず、すぐに  
その場を退いて謹慎きんしんせよという。

その夜、仲壬はひそかに斉に奔った。

病が次第に篤あつくなり、焦眉しょうびの問題として真剣しんけんに後嗣の  
ことを考えねばならなくなった時、叔孫豹はやはり仲壬  
を呼ぼうと思った。豎牛にそれを命ずる。命を受けて出  
ては行つたが、もちろん斉にいる仲壬に使を出しはしな  
い。早速仲壬の許へ使を遣つかわしたが非道なる父の所へは

二度と戻らぬもとどという返辞だったと復命する。この頃になつてようやく叔孫にも、この近臣に対する疑いが湧わいて来た。汝なんじの言葉は真実か？ と吃きつとして聞き返したのはそのためである。どうして私が偽いつわりなど申しましよう、と答える豎牛の唇くちびるの端はしが、その時嘲あざけるように歪ゆがんだのを病人は見た。こんな事はこの男が邸やしきに来てから全く始めてであつた。カツとして病人は起上ろうとしたが、力が無い。すぐ打倒れる。その姿を、上から、黒い牛のような顔が、今度こそ明瞭めいりょうな侮蔑ぶべつを浮うかべて、冷然と見下す。儕輩や部下にしか見せなかつたあの残忍な顔で

ある。家人や他の近臣を呼ぼうにも、今までの習慣でこの男の手を<sup>へ</sup>経ないでは誰一人呼べないことになってい<sup>る</sup>。その夜病大夫は殺した孟丙のことを思<sup>つて</sup>口<sup>く</sup>惜<sup>や</sup>し泣<sup>き</sup>に泣いた。

次の日から残酷<sup>ざんこく</sup>な所作<sup>しよさ</sup>が始まる。病人が人に接するのを嫌<sup>きら</sup>うからとて、食事は膳部<sup>ぜんぶ</sup>の者が次室まで運んで置き、それを豎牛が病人の枕頭<sup>ちんとう</sup>に持って来るのが慣<sup>なら</sup>わしであったのを、今やこの侍者が病人に食を進めなくなつたのである。差出される食事はことごとく自分が喰<sup>く</sup>つてしまい、からだけ<sup>を</sup>また出して置く。膳部の者は叔孫<sup>た</sup>が喰<sup>べ</sup>たこ

と思つてゐる。病人が餓うえを訴うったえても、牛男は黙だまつて  
 冷笑するばかり。返辞さえもはやしなくなつた。誰たすけに助  
 を求めようにも、叔孫には絶えて手段が無いのである。

たまたまこの家の宰さいたる杜洩とせつが見舞みまいに來た。病人は杜  
 洩に向つて豎牛の仕打しうちを訴えるが、日頃の信任を承知し  
 ている杜洩は冗談じょうだんと考えててんで取合わない。叔孫が  
 なおも余り真劍に訴えると、今度は熱病のため心神が  
 錯乱さくらんしたのではないかと、いぶかる風である。豎牛もま  
 た横から杜洩に目配めくばして、頭の惑乱わくらんした病者にはつくづ  
 く困り果てたという表情を見せる。しまいに、病人はい

ら立って涙なみだを流しながら、痩せや衰おとろえた手で傍の剣を指し、杜洩に「これであの男を殺せ。殺せ、早く！」と叫さけぶ。どうしても自分が狂者としてしか扱あつかわれないうことを知ると叔孫は衰えきつた身体を顫ふるわせて号泣する。杜洩は牛と目を見合せ、眉まゆをしかめながら、そつと室を出る。客が去ってから始めて、牛男の顔に会え体の知れぬ笑が微かに浮かぶ。

餓と疲つかれの中に泣きながら、いつか病人はうとうとして夢を見た。いや、眠ねむったのではなく、幻覚げんかくを見ただけかも知れぬ。重苦しく淀んだ・不吉な予感に充みちた部屋

の空気の中に、ただ一つ灯が音も無く燃えている。輝かがやきの無い・いやに白っぽい光である。じつとそれを見ている中に、ひどく遠方に——十里も二十里もかなたにあるもののように感じられて来る。寝ている真上の天井が、いつかの夢の時と同じように、徐々に下降を始める。ゆっくりと、しかし確実に、上からの圧迫は加わる。逃れようにも足一つ動かせない。傍を見ると黒い牛男が立っている。救を求めても、今度は手を伸べてくれない。黙ってつつ立ったままにやりと笑う。絶望的な哀願あいがんをもう一度繰返すと、急に、慍おこったような固い表情に変わり、眉

一つ動かさず凝<sup>じ</sup>乎<sup>っ</sup>と見下す。今や胸の真上に蔽<sup>おお</sup>いかぶさ  
つて来る真黒な重みに、最後の悲鳴を挙げた途<sup>と</sup>端<sup>たん</sup>に、正  
気に返った。……

いつか夜に入ったとみえ、暗い部屋の隅に白っぽい灯  
が一つともっている。今まで夢の中で見ていたのはやは  
りこの灯だったのかも知れない。傍を見上げると、これ  
また夢の中とそっくりな豎牛の顔が、人間離れのした  
冷<sup>れい</sup>酷<sup>こく</sup>さを湛<sup>たた</sup>えて、静かに見下している。その貌<sup>かお</sup>はもはや  
人間ではなく、真黒な原始の混<sup>こん</sup>沌<sup>とん</sup>に根を生やした一個の  
物のように思われる。叔孫は骨の髓<sup>ずい</sup>まで凍<sup>こお</sup>る思いがした。



己を殺そうとする一人の男に対する恐怖きょうふではない。むしろ、世界のきびしい悪意といったようなものへの、へりくだ遜った懼おそれに近い。もはやさっきまでの怒は運命的な畏怖いふ感かんに圧倒あつとうされてしまった。今はこの男に刃向はむかおうとする気力も失うせたのである。

三日の後、魯の名大夫、叔孫豹は餓うえて死んだ。

(昭和十七年十一月)



日本文学電子図書館

---

「中島敦 ちくま日本文学012」

著 者：中島 敦

制作者：宮澤一郎

出版社：筑摩書房

2009年6月30日 第3刷発行

---



日本文学電子図書館